

# 太賢の『梵網經古迹記』に関する一考察

——元暁との関連を中心として——

李 忠 煥

1. 周知の通り、新羅太賢（生没年未詳）の『梵網經古迹記』（以下『古迹記』）は、初めて『梵網經』上下巻を註釈した註釈書であるが、その影響関係に関して従来の研究では、元暁（617～686）・法蔵（643～712）の影響<sup>1)</sup>と、勝莊（生没年未詳）・義寂（681～?）の影響<sup>2)</sup>の二系統が論じられている。本研究は元暁・法蔵の影響、特に元暁との関係に注目し、『古迹記』の戒律観を元暁の註釈書から検討する。元暁は一心思想に基づいて和諍と会通の著述をした新羅を代表する僧侶である。元暁の『梵網經』註釈書としては、『菩薩戒本持犯要記』（以下『要記』）と『梵網經菩薩戒私記』（以下『私記』）が現存する。『要記』は「梵網戒」・「瑜伽戒」・「比丘戒」の比較を通じて大乘の戒相を論ずる。『私記』は『梵網經』の註釈書として、現在は「十重戒」までの上巻のみが存在する。元暁も『梵網經』を一乗分教と分類し、三聚戒を導入して犯戒の判断をより大乘的にしたが、両者は相当に類似した点を持っている。本研究では、このような戒律観の類似点を比較し、『古迹記』に見られる元暁の影響を明らかにしたい。

2. 元暁と太賢の影響関係について吉津宜英は、『大乘起信論』の太賢疏の特徴として、法蔵の『大乘起信論義記』と元暁疏及び『大乘起信論別記』の引用、元暁の一心観の徹底的援用、法蔵の五教判の導入を主張する、そして、『梵網經』においては、上巻の華嚴的な説相の註釈を通して元暁・法蔵の融合をしているし、引用の数は少ないが、元暁の一心観に基づいて「瑜伽戒」と「瑜伽戒」を批判する法蔵疏を調停できるようにしていると論ずる<sup>3)</sup>。

吉津の主張のように、太賢は元暁の一心観を重視し、『古迹記』で『梵網經』と『華嚴經』を一体として把握し、梵網戒に三聚戒を導入させる円融の註釈をしている。このような『古迹記』における元暁の影響は戒律観でも確認することができる。

先ず元暁と太賢は、『瓔珞經』の戒体論を用いて『梵網經』に心法戒体説を認め、「心」は仏性種子として戒の実性であると論ずる。そして太賢は、戒を受ける

## (8) 太賢の『梵網經古迹記』に関する一考察 (李)

ためには必ず大菩提心の発心が必要であり、発心に依って戒も永遠に持続すると説く。

六道衆生但解師語，要須先發大菩提心，謂誓定取無上菩提，窮未來際，利樂有情。(T40, 700a28)

若不放捨無尽戒願，無有尽犯，無辺戒故，由此轉生，戒亦恒隨運運增長乃至成仏，猶如河水日夜不停，運運遷流自到大海，唯除故捨大菩提心，彼既心尽戒亦尽故。(T40, 701a13)

つまり、戒は大菩提心の発心によって生じて涅槃に導く方便なのである。このような太賢の戒律観は、元暁の『要記』と『私記』で確認することができる。元暁は『要記』の冒頭で、菩薩戒とは根源に帰するための渡し場であると定義づけている。

菩薩戒者，返流帰源之大津，去邪就正之要門也。然邪正之相易濫，罪福之性難分。(T45, 918b6)

これは、戒は絶対的なものではなく、涅槃へ至るための一つの方便にすぎないので、戒相に執着してはならないことを説いているのである。更に『私記』では、戒を受持することによって仏果を得ることができるし、この戒は三聚戒として三聚戒の徳目によって正覚菩提果に至ることになると説く。

能生仏果者，是戒家中功德義。能防非者，是功德家中戒義。是故戒家功德義，方得能生仏果。是因果義。(X38, 279b21)

此三聚戒者，律儀戒者，為断徳目，撰正法戒者，為智徳目，撰衆生戒者，為恩徳目。此三目故得成三徳果。故言由此成正覚。合三徳而為正覚菩提果故。(X38, 277a4)

このように両者は、戒によって涅槃に至ることができると論じている。そして、元暁はその戒を三聚戒とみて、梵網戒の解釈に三聚戒を導入し、『梵網經』に一切戒を含めている。一方、太賢も『梵網經』に三聚戒を用い、撰律儀戒に七衆戒を含め、諸戒は三聚戒の義を具すると論ずる。

そして、太賢は「宗趣」の説明で、「宗」は戒で、菩薩の修行の行と『梵網經』の十重四十八軽戒であり、「趣」は帰すべきところで、一切が空であるから、性相や有無のような分別をしてはならないし、執着もしてはならないと説く。これは戒の実相とも関連しており、涅槃の根本になる戒であるが、その存在は発心の因縁によって成り立ったものであるから、実際に存在するものではなく、方便として存在するのを如実に認識しなければならないのである。

如瑜伽云，於空性相有失壞者，便為失壞一切大乘。是以菩薩行六度時，皆無所得以為方便。無所得者即不住道。若唯空有便可得無。而復空空故無所得。無所得故三輪清淨。是

名究竟修菩薩行。(T40, 690a22)

太賢のこのような戒の実相に関する説明は元暁にも表れている。元暁は『要記』と『私記』で、戒は中道として因縁によって生ずるが、自性を持っていないし、因縁によって生じた戒は有るものではないが、兎の角のように因縁さえないものではないと論ずる。また、戒が無いとすれば犯戒はしないが、永遠に戒を失うことになり、戒が有るとすれば持戒はするが、戒の実相に反することになるから、持戒が即ち犯戒になると説く。つまり、戒は因縁によって生ずるが、有無の両辺を離れている中道の状態なので、戒の有無に執着するのは、両方とも誤った理解で、どちらも戒を犯して失うことになる。

非有非無者，現戒離辺中道。論戒体者，從因縁生故。推求於因縁，戒自性不可得故非有。從因縁生戒雖非有，而不同於兎角無。故言非無。(X38, 279b7)

若於此中，依不是有，見都無者，雖謂無犯，而永失戒。誹撥戒之唯事相故。又於此中，依其不無，計是有者，雖曰能持，持即是犯。違逆戒之如実相故。(T45, 921a17)

このように元暁と太賢は、戒は涅槃の根本であるが、同時に因縁によって生じた中道の状態であるから、このような戒の実相を誤って理解して執着すれば、むしろ涅槃から離れることになる論ずる。

また、仏性について両者は、一切衆生に仏性があるが、煩惱によって顛倒され、それを見つけることができないのであると述べ、「一切衆生悉有仏性」を二門を通じて説く。先ず、太賢は「宗趣」の説明で、「趣」を「如来性門」と「発趣相門」に分け、「如来性門」は真如性と一心、「発趣相門」は妄念によって顛倒されて如来性を見つけることができない状態であると述べる。そのため、大菩提心の発心を通じて苦海を脱しなければならないと説く。

所歸趣者亦有二門。一如来性門。二發趣相門。(T40, 689c14)

第二發趣門者，如是内有如来性。故聞諸有情同如来藏，妄念所飄苦輪無際。生死大海誓為舟楫。不畏其中所受大苦，發不可壞無礙意樂，謂大菩提。(T40, 689c28)

元暁も一切衆生は清浄な真如心を本来持っているが、生滅心も同時に持っているので、仏性を顕現することができないのであると述べる。

一切衆生凡有心者，當得阿耨多羅三藐三菩提故。凡有心者，有二種心。謂一者真如心。…二者心生滅心。…衆生皆有如是二種心，故名一切有心者。(X38, 277c4)

このように両者は、発心を通じて受戒をし、本来内在している仏性を発して涅槃

## (10) 太賢の『梵網經古迹記』に関する一考察 (李)

槃に至るのを仏道修行とみている。

3. 以上の検討のように、元暁と太賢は『梵網經』の註釈において類似した戒律観をみせている。先ず、戒を涅槃の根本とみて、発心によって受戒できると述べる。しかし、戒は因縁生という中道の性格を持ち、正しい菩薩行を通じて涅槃に導く方便にすぎない。したがって、このような戒の実相を誤って理解して有無に執着すれば、どちらも戒を犯して涅槃から離れることになる」と説く。つまり、戒さえも因縁によって成り立ったものなので、その存在に執着するのは仏教を誤解することになるのである。そして、両者は「一切衆生悉有仏性」を二門に分け、発心による受戒を通じ、煩惱を除いて涅槃に至るのを強調する。

このように太賢は『古迹記』で一心観のみならず、戒律観においても元暁の影響を強く受けたと考えられる。

そして、このような戒律観は、一心観と共に『古迹記』の大乗的註釈の根幹になって、『梵網經』の位置づけをより確固たるものにしたと考えられる。

- 
- 1) 吉津宜英『華嚴一乗思想の研究』(大東出版社, 1991).
  - 2) 蔡印幻『新羅仏教戒律思想研究』(国書刊行会, 1977), 崔源植『新羅菩薩戒思想史研究』(民族社, 1999).
  - 3) 吉津宜英前掲書, pp. 544-664.

## 〈参考文献〉

蔡印幻 1977『新羅仏教戒律思想研究』国書刊行会.  
 崔源植 1999『新羅菩薩戒思想史研究』民族社.  
 吉津宜英 1991『華嚴一乗思想の研究』大東出版社.

〈キーワード〉 太賢, 元暁, 戒体論

(花園大学大学院)